The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

# 近世東本願寺造営史研究から見える諸課題
## ――徳川幕府治世下の東本願寺造営――

木場明志

### はじめに―東本願寺造営の概略―

真宗大谷派本山である東本願寺（正式名称「真宗本廟」）は、慶長七年（一六〇二）年に本願寺を二分する分派によって成立している。同年、徳川家康は京都西六条の本願寺にあって住持職退隠の身にあった教如に対し、京都東六条に新たに寺地を寄進した。翌年（一六〇三）には、重臣本多正信に命じて、上州厩橋（群馬県前橋市）妙安寺にあった、親鸞門弟の常然（成然）が親鸞から授けられたとの由緒がある親鸞木像（御真影）を召し上げ、重ねて教如に寄進した。それらを受け、教如は阿弥陀堂・御影堂（当初は開山堂と称した）の造営に着手し、慶長八年（一六〇三）中には阿弥陀堂が、同九年（一六〇四）に御影堂が竣工して別立の本願寺が出来、それまでの本願寺（西本願寺）に対して東本願寺と称されるようになった。この東本願寺創建について、家康は唐門（総門）・鐘楼など伽藍の一部をも寄進している。さらに、寛永一八年（一六四一）年に徳川三代将軍家光は、寺地を加増寄進して寺内面積を西本願寺と同等にし、四代将軍家綱は、明暦四年（一六五八）の御影堂をほぼ現在規模に拡張した大改築について、富士山麓の幕府御用林から造営用材の一部を寄進した。寛文一〇年（一六七〇）には阿弥陀堂の改築も成り、ここに西本願寺と並び立つ東本願寺大伽藍が完成した。

しかし、御影堂大改築から一三〇年後の天明八年（一七八八）京都大火に全伽藍は類焼し、その後再建を果たすも文政六年（一八二三）の山内出火、安政五年（一八五八）の京都大火、元治元年（一八六四）禁門の変による京都市中兵火により、一八世紀末以降の七〇余年間に四度も全焼の災難に遭っている。そのたびに、同規模あるいはそれ以上に再建造営され、現在の東本願寺は明治二八年（一八九五）竣工の建築である。親鸞木像を安置する御影堂は木造建築物としては世界最大の敷地面積を持ち、間口七六メートル、奥行五八メートルである。なお、高さは三八メートルで、北に向って傾斜して標高

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



が高くなる京都の地形を利用して、東寺五重塔・西本願寺御影堂より若干高く、皇室への遠慮から御所の紫宸殿よりわずかに低く設計された経緯がある。とにもかくにも大建築であるといえよう。

## 一　課題の所在

親鸞没後七五〇年を平成二三年（二〇一一）に迎える浄土真宗各派では、その記念事業として本山建築の大規模修復が行われている。真宗大谷派東本願寺もまたその例であって、御影堂・阿弥陀堂の瓦葺き替えを中核とする修復が進められている。その報告書は修復を担当した修復業者がまとめつつあり、明治の木造大建築に近世以来の建築技術が凝集されていたことが明かされるであろう。

一方、近世初頭に東本願寺として創建されて以来の造営史については、従来語られたものがない。わずかに井上鋭夫『本願寺』（至文堂　一九六二年）、名畑崇『本願寺の歴史』（法蔵館　一九八七年）に触れられてはいるが、いずれも中世教団史の記述に添えられている程度に過ぎず、まして近世以降の造営史に視点を置いた成果はほとんど見られない（親鸞七百回忌を記念した本願寺維持財団編『明治造営百年東本願寺』があるが、表題のごとく近世についての記述は少ない）。真宗大谷派では、親鸞聖人七五〇回御遠忌を迎える記念事業の一環として、四年計画の研究プロジェクト「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」を構想し、それを大谷大学真宗総合研究所に委託している。ここでは、その研究プロジェクトに深く関わっている立場から、東本願寺造営史研究から見える諸課題の内、徳川幕府治世下の東本願寺造営に的を絞って、近世だけでも創建から数えて五度におよぶ造営について、①歴史、②信仰、③建築の三つの分野をめぐる課題と、それらへの現時点での解明状況を示してみたい。三分野を挙げたのは、当該プロジェクトがそれら三分野に大別して進められているからである。

東本願寺創建に先んずる天正一九年（一五九一）に大坂天満から京都西六条に移転して建てられた西本願寺は、元和三年（一六一七）に一度全焼するが、寛永一三年（一六三六）に再建されて現在まで威容を保っている。西本願寺同様の大伽藍を造営した東本願寺について、再建のための費用を考えただけでも、寺領もないのに、どうして五度の造営が可能であったのか。それを支えた真宗門徒の信仰はいかなるものであったか。その建築方法や作事組織上の工夫はどこにあったか。西本願寺では見ることの出来ない独特の課題を追求することは、ただに東本願寺造営史研究というだけでなく、近時盛んとなってきた近世寺社造営史研究の全般や、近世史・近世仏教史・近世思想史・建築史などに、多大に寄与し得ると考えている。なお、使用する史料は今般のプロジェクトが収集あ



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

るいは新たに解読したものである。

## 二　「歴史」をめぐる課題―東本願寺が拠りどころとした徳川家由緒―

先述のごとく、東本願寺は本願寺住持職を弟准如に譲って退隠の立場にあった教如が、徳川家康との格別の昵懇関係を築いて、家康から寺地と親鸞像・伽藍の一部を寄進された由緒を持つ。これは、近世における、度重なる再建造営を可能にした基礎的要因となった。

東本願寺が徳川家由緒を強調することは、造営時においてもなされた。初めての罹災である天明八年（一七八八）火災焼失からの寛政度再建には、徳川幕府に先例の由緒をもって用材寄進を要請している。東本願寺文書『材木拝領等一件』を基軸に見ることにしよう。

東照宮様御取建之對神慮江　旁以再建之儀取急キ被存置候事ニ御座候　右ニ付大猷院様御代此度類焼之堂宇造立ニ付　十三代目宣如御門跡〈但教如／嫡男〉被願上駿州冨士山之樹木拝領被仰付　則宣如冨士江被致登山度旨御聴届有之　願意之通材木伐出し堂宇造立有之候而　開山傳来之宗意被致弘通　今以門末化導之本意を遂られ候事　偏ニ御厚恩不浅被存候　右ニ付今般冨士山之先例を以　別所ニ而成とも右再建ニ相用ひ候良材拝領被仰付被下置候様御願被申上度　尤表向御奉行所江御願可被申上候得者先ッ御内意奉伺候

ここに挙げた史料は、東本願寺配下の江戸浅草御坊輪番から幕府寺社奉行に内意を伺ったものである。傍線部に明らかなように、家康由緒をもって再建への助力を願っている。この時は、幕府の内意を得て京都所司代、および京都東西町奉行所に再建作事を届出て許されている（東本願寺文書「東本願寺再建取掛り御届一件」）。浅草御坊輪番が幕府と交渉を重ねた結果、翌寛政元年（一七八九）には、幕府寄進用材は旧高山御坊昭蓮寺領である飛騨白川村（岐阜県白川市・高山市）幕府御用林からと決まり、具体的にどの村からが良いかさらに交渉し、真宗門徒が多く、かつ貧困救済のための労賃支給が行政策的にも効果的である村々から伐り出すことに決した。すなわち、従来は飛騨南部から伐り出して木曽川筋を利用してきたが、今般は飛騨北部の、貧困救済金を支給してきた村々からの伐り出しにしようとなった。また、そのために、伐採木の川下げには富山湾の北前船寄港地である伏木港に通ずる庄川筋を選び、伏木港から日本海を下関廻り航路で大坂に運ぶことにしたのである。運搬路および航路途上の領主に対しては、幕府寄進の用材としての安全を幕府威光によって保障するよう、幕府触れ流しを東本願寺から要請し、幕府用材であることを示す船印「飛州〇（日の丸印）御用木」の拝借も願った。ただし、運搬のための人材や費用のすべては東本願寺側で負担するとしたのである。拝領木数は四千六百七十本余と定められた。それらの部分の記述を傍線を付しながら掲げて



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



みよう（『材木拝領等一件』）。

公儀御林之事ニ御座候得共（略）右寺領之村々近来困窮之由ニ而少分之年貢等も難渋仕年々救を相願候ニ付　掛所役人共ヨリ承糺候處　北方之御用木御伐出シ之義御都合不宜由ニ而　近来休山被仰付　南方木曽川出之御手寄宜山内計御用木ニ被仰付候ニ付　北方之村々江者年々従公儀御手當等被下置候得共　右北方之内白川郷之義者従来農桑ニ乏場所故　一入難渋仕候旨寺領所々者共内々相歎候ニ付　年々救金致手當遣候程之儀ニ御座候　依之何率可相成義ニ御座候ハ、　右之場所ニ而願之通御材木拝領御許容被成下候上者伐出し等之費用本山ヨリ差遣候ハ、　山中邊鄙究艱之者共江扶助之筋ニも可相成哉と被存候而　休山ニ被仰付候義書認　右之趣意相含被願上候義ニ御座候　以上

（中略）飛州白川郷山内ニ而拝領之御材木伐出し運送等者　本山之入用を以可被致旨　先達而被仰渡被致承知候　然ル所飛州白川ヨリ越中金屋江川下ヶ　伏木湊より船積北海より長州下之関大坂表ヨリ京着迄数百里之海路を経候事故　大切之拝領木万一流失等之難有之候而者歎敷被存候へとも　本山之手先ニ而ハ　右躰海上臨時之防難行届　依之川筋海邊其筋之御觸流被仰付　運送之節京着迄御船印被致拝借度被願上候　左候ハ、海路無滞着木有之　京都ニをいて殊更忝可被致拝受奉存候　以上

（中略）御林之御場所并御材木之員数等御糺追而可被仰渡との御事ニ御座候　然ル處此節白川郷之内加須良村尾上郷村尾神村右三ヶ村御林ニ而　槻桂栗都合四千六百七拾本余可被下之旨　関東表ヨリ其御役所江御沙汰御座候由ニ而　御書付を以其御地懸所輪番江御申達御引渡可被成との御事　先以忝被存候

さらには、本願寺門主の意向である質素・節約の旨を幕府に伝えながらも、拝領木が欅・桂・栗に限られていては用材としては不充分で、造営について重要な部分を飾るための桧材について、幕府による売買停止措置によって規制されていることを知りながら寄進を願い出ている（同文書）。徳川家との格別な関係を利用しての無心に他ならないであろう。

そうした度重なる陳情と交渉の結果、寛政三年（一七九一）一月、幕府は用材運搬の経路に当たる国内全地域に触れ流しを行い、幕府寄進用材の安全を保障したのであった。その写しが記されているが、川下げ中の洪水による流出、あるいは海上における風難事故があっても、流れ着いた材木は届出のあった最寄の代官所や藩の出先機関によって東本願寺用木として処置するというものであった（同文書）。

飛州御材木川々海邊御觸流御書付写

京都東本願寺江被下置候御材木　飛州白川郷山内ヨリ槻桂栗伐出シ越中金屋江川下ヶ　伏木湊ヨリ船積致し京都江廻木申付候間川通リニ而不時出水有之候節御材木押流候歟　又者於海上逢難風及難　船御材木放乱致し候ハ、　川通海辺附村々名主組頭百姓共罷出御材木流失無之様大切ニいたし　其場所江取揚置　最寄御代官并御預所江早速令注進　右役人差図可請候若隠置　後日於相聞ハ可為曲事者也

（宛先）　飛騨白川郷山内ヨリ越中伏木湊　夫ヨリ海上
能登加賀若狭丹後但馬因幡伯耆出雲石見長門周防
安藝備中備後備前播磨大坂　夫ヨリ伏見高瀬川通
京都七条迄御料私領村々寺社領



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

また、伐木を済ませた後に山中を運搬するに当たり、幕府は材木を滑らすための敷き木や作業小屋用の木については、幕府御用林を使わず東本願寺側が用意するよう求める。先述のように、この地は真宗門徒の多い村々の地であり、東本願寺はこれを受け入れて門徒に栗・ぶな・楓を準備させている（同文書）。

無事に幕府寄進用材の入手に道筋がついたころ、東本願寺は飛騨白川村御用林からの寄付用材だけでは賄えない太い柱・虹梁のための用材を、三河（愛知県西部）門徒寄進による信州（長野県）遠山からの伐り出しに求める。そして、これについても、家康の取立てによる東本願寺の再建が成就しないでは済まされないからと理由をつけ、用材安全のために御用材と同様の扱いを願い、天竜川川下げの道筋に幕府触れ流しを求めた（同文書）。

大堂造営之儀ニ候得者　柱虹梁等木品注文之寸間揃兼申候　依之信州遠山百姓持林之内ニ而　右飛州拝領之御材木足木ニ被致度木品有之候ニ付　此節元伐仕　追々川邊迄積出置可成丈者當山手限運送仕候積リニ御座候處　元来大木之儀ニ候故出方甚差支出来仕　勘弁仕候へ共全公儀御威光ヨリ御觸流等不被成下候而ハ　運送差支申候　就夫遠山ヨリ掛塚湊迄川下ケ御觸流し御願被申度候　尤拝領木と者趣意別段ニ而　右場所之儀者當山手限之事ニ候へ者　飛州拝領木御伺様之御觸流し被成下度と被相願候義ニ而者無御座候へ共飛州拝領之足木ニ被致度　殊更大木之儀ニ候へ者浦々ニ而出方難渋有之候間　何卒御勘定所御手限ニ御觸流被成下候歟　又者御支配御代官所江御觸ニ而も被成下候様御願被申度候　依而此段為御問合被申入候　以上

こうして、寛政度再建における幕府飛騨御用林からの拝領材伐木は、桧の追加寄進は叶わなかったものの、当初の約束に従って四六七四本が得られ、運搬のための敷き木（ブナ・楓・朴）一七〇〇本余は下刈りの名目で雑木を伐ることが出来たのだった。

幕府用材寄進については、東本願寺側は浅草御坊輪番・飛騨御坊昭蓮寺が、幕府側は老中・勘定奉行が窓口となって進められた。東本願寺側は徳川家取立ての由緒を梃子に用材の調達を進め、幕府側は御用林の保護・領民撫育の面を考慮しながら東本願寺に便宜を与えていったことが知られる。

近世の再建造営を見れば、幕末の元治元年（一八六四）焼失の後、明治維新の混乱を経たとはいえ明治度再建の発示が明治一二年（一七七九）まで遅れ、さらに同二八年（一八九五）の竣工までに一六年を要した理由は、徳川幕府との関係が途切れたこと、明治新政府との新しい関係を構築するのに年数が必要だったことによるといえるだろう。

## 三　「信仰」をめぐる課題

次に、真宗信仰と造営史の関係を見てみよう。東本願寺は





NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



寺領を持たないので、造営資金は寄進に頼らねばならないところに特質があった。造営作事推進の起爆剤として幕府による大口の用材寄進を求める一方、多数の門徒を抱える北陸・東海地域などにその他の大口分担を依頼している。寛政度再建では、具体的には越中（富山県）門徒に幕府寄進の飛騨御用林用材伐り出し・運搬の夫食米（人夫日当・給米）の負担、および御影堂小屋組み一切の請負、そして三河門徒には信州遠山の用材切り出し・運搬の全面負担を依頼した。いずれも、作業費用を地域門徒負担に委ねることにより、東本願寺の直接出費が大幅に減ずる効能があった。また、京都での堂舎作事についての部分請負をも地域門徒単位に受け付け、工人の作料（技術料）・飯米料（日当）を地域門徒負担に帰することで工費を圧縮することが出来た。そのほか門徒個別の寄進も受け付けたが、これらの金銭寄進・米味噌など現物寄進・労働寄進・技術寄進などは、「信施」の言葉で表される「阿弥陀如来の本願によって浄土往生が決定したことへの報謝」の行いであると位置づけられた。門徒による信心獲得への御礼の表現であり、造営事業は信心獲得を一人でも多くの人に勧める事業として展開したところに、真宗作事としての大きな特徴があった。

伽藍再建の目的は当然のことながら親鸞聖人による宗意の弘通にあったが、本山からの依頼を受けた越中門徒の場合を見ると（城端別院文書一五七号）、

郡内之同行年寄ニて示談仕候処　□□御指急之御普請を　たとひ　年月被取積候共　私共報謝之信施御得至被為下与之御尊慮被為在御座候御事を乍奉　聴　聞　御門末之私共報謝之実意ニ不得至候時ハ　御指急之御再建之御取持如何　可仕哉　御再建之遅速者全私共壱　人之身之上之一大事ニ奉□□入候
（中略）出離之一大事を金銀ニ見替候拙キ私共江　指急信心決定仕候へとの深重之御慈悲与者敬承

とあるように、門徒たちの地元では「報謝の信施」の立場からの本山造営への寄進を決め、信心未決定の者も、これへの参加を機会に信心獲得に至るようにすべきであると受け止めている。「信施」は真宗では常用する語であり、信心そのものを何らかの形で寄進に換えることを意味した。人間にとっての「出離の一大事」への想いを、寄進行為によってしか示せない門徒であることを恥じながらも、造営への寄進を機会に「信心決定」が促されていることへの自覚を深めようとした地方門徒たちの姿が見える。このように、信心と造営への寄進とが一体化して進められたのが東本願寺造営事業であった。信心を得てそれを維持することを「法義相続」と言い、法義相続の立場から本山造営のために寄進することを「本廟護持」と言った。この二つは一体であり、「法義相続・本廟護持」は対語として用いられたのである。

ところで、地方門徒たちがその地方の大工・木挽を京都で



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の造営作事に派遣し、その諸入用を負担する場合、その寄進は門徒にとっては大工派遣寄進であり、派遣された門徒大工・木挽にとっては技術寄進であった。それは名目だけでなく、実際に寄進であったことを、京都で組織していた京大工組合が認定している例がある。寛政度再建において、地方大工が京都本山で仕事をすることについて、賃稼ぎのためでなく、京大工の仕事の妨げにならないことを認めたのであった。その文言は（東本願寺文書「御再建日記」第三巻）、

大工木挽も御門徒之儀　信於寄進之事ニ候得者　（中略）御再建ニ付、諸国より寄進之儀ニ御座候へハ格別之儀ニ付　役大工役木挽共相糺候処実之寄進ニ而　一両日ツ、滞留仕相働候儀ニ御座候承知仕候

というものであり、「信（信そのもの）を寄進」する上は、一両日ずつの京都での仕事くらいなら容認しようというものであった。

全国の門徒衆への再建助力の依頼は、焼失後に先ず建てられる僧俗共議の場である惣（総）会所に門主の意向として伝えられ、さらにそこから、御坊と称される地方拠点寺院へと伝えられる。地方の御坊では、信心の教導にあたる示談方（僧侶）と取持ち寄進を取りまとめる世話方（門徒）が決められて地域での実働に移る。度重なる繰り返しの教導による信施の依頼がなされる体制が組まれ、寄進へと繋がるシステムであった。忘れてならないのは、そこでは本山の建物を造ることが肝要なのでなく、信心を得ることが第一義であるとどこまでも強調されることである。それは、宗祖親鸞が、起立造塔の勧進職を断った師の法然（『黒谷法然上人伝』巻一〇）に倣って、「念仏勧進」（念仏を勧めること）のみを行って門弟の「報謝のこころざし」を受けた伝統に拠っている。京都に住した晩年の親鸞は、関東在住の門弟に念仏を勧めた結果としての報謝の志金を「念仏の勧めの物」として受けていた。東本願寺は大伽藍を造営・経営する時代に至っても、なお親鸞の生き方を踏襲する理念を持ち続けていた。『親鸞聖人御消息集』によってそれを確かめれば、

護念坊のたよりに　教忍御坊より銭二百文御こころざしのものたまはりてさふらふ　さきに念仏のすすめのもの　かたがたの御なかよりとて　たしかにたまはりてさふらひき　ひとびとによろこびまふさせたまふべくさふらふ　御返事にて　おなじ御こころにまふさせたまふべくさふらふ

と見え、親鸞は関東門徒もまた自分と同じ念仏を喜ぶ心になって欲しいと願っていたのであった。そして近世の東本願寺門主はといえば、例えば天明八年（一八七七）の初めての焼失に遭遇した翌日、門主乗如は御書を発して悲歎の気持ちを表している。そこでは、京都市中の門徒による失火が大火の原因という噂を聞いての嘆きが見られる（東本願寺文書『乗



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



如様御作文』）。

あの御堂は復も時節ありて再建も出来様が　往生の仕直ばかりは出来ぬ　しかるに御開山より御預りの門徒一人地獄へ落したるは落度とは思ひぬ　（中略）これひとへにまよひの凡愚をあはれみて　さとりのミちにいたらしめんがための巧妙の方便なるものか

初めての大堂焼失にも拘らず「往生のし直し」が出来ないことの方を重視し、焼失は迷いの門徒を悟りの道に導くための方便であろうかとしている。また、二回目の焼失である文政六年（一八二三）の山内失火に際して、門主達如は未安心の輩が存在する限り本廟の災難は絶えることはないと言い切っており、後に続く再建造営は、まさに未安心の輩を無くす教導の営みと分かち難く結びついていた。真宗信心の厳しさと凄まじさを思わずにはいられない文言であるのでこの項の最後に紹介しておこう（東本願寺文書『達如様御作文』）。

平生不法懈怠にして　いたつらに明し　徒に暮し　未安心の輩を仏祖のあはれみ玉ひて転変の相を示し　勢者必衰のことはりを知らしめ玉ひて　有為の娑婆をいとひ　常住の極楽をねがはしめむかための方便なるものかと　身の毛のよたつ斗り空をそろしくをほえはむへれ

## 四　「建築」をめぐる課題

従来、建築学の方面から東本願寺造営について知られることは甚だ少なかった。未知のことがらとしては、例えば、近世に大工頭として徳川家関係の造営と禁裏造営を担った京都の中井家との関係、あるいは東本願寺が独自の作事組織を持っていたとすればその実態、地方大工・地方手伝門徒を大量に擁した作事の進め方の実際、諸事倹約が触れられていた江戸幕府治世下での大規模作事の倹約的ありかた、などである。東本願寺所蔵文書には造営関係資料が約6千点確認されており、今後の解読進行と建築学専門研究者の参画によって、諸課題を解きほぐしていくことができると思われる。ここでは、解明されてきたことの一端を記してみたい。

これまでは、東本願寺には笠井若狭守というお抱えの紀州大工棟梁家があって、そのために大工頭中井家との関係はほとんどないものと考えられてきた。しかし、東本願寺と徳川家との昵懇関係を考えれば、近世初期の徳川家関係造営を一手に行った中井家との関係は、一定の範囲であっても存在したはずであろう。事実、創建後の大規模建築への改造に当たっては、中井家に造営の統括を求めた形跡を発見することが出来た。すなわち、中井家配下の大和棟梁であった西村越前守が東本願寺造営に棟梁として名が見えており、西村が他流からの茨木三河守の参画を求めて明暦・寛文度再建が成ったという。この間の事情を史料に見てみよう（城端別院文書『御再建見聞私記』）。



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

御鉛始承応元壬辰年より始リ御出来ハ明暦四戊戌改元万治元年なり　以上七ケ年之間に御満足しかも宮殿厳麗竭摩尽工　参詣之道俗此伽藍を拝することの不覚転入浄土門　時に棟梁ハ西村越前茨木参河之両匠なり　大伽藍建立の事ニ候得者大工方志□等も有之ニ付　中井大和大工方之儀御取持被申上候　但シ中井大和大工方支配被蒙仰候ハ東照権現様ヨリ相はしまる　元の居所奈良ニ而有之候　京住と相成候ハ天和比ニ而　其以前ハ池上矢倉弁慶の三組ニて致支配来候事此三人　当時中井の組となる　京都三組之内ハ勿論洛中洛外名有工匠段々御吟味有之候得共　格別之者も無之別中井大和棟梁之内　西村越前と申者へ棟梁被仰付候　此者若年之頃より衆人ニ勝れたる器量者ニて　既ニ十八歳の時黒谷の堂舎客殿方丈庫裏等の作事棟梁を相勤む格恰好て出来候ニ付　其名後世まても残りたるに惜成焼失す　夫ヨリ次第に執引して右棟梁蒙仰其年齢三十九才之時なり　此者其頃申上候ハ此度不存寄棟梁被仰付候ハ誠ニ家業の名利に相叶ひ難有御請仕候　併かゝる大伽藍壱人ニ而引請候儀古来より仕さる儀ニ候得ハ　他流之大工方一人御加へ可被下旨相願候ニ付　茨木参河被仰付候而御堂御成就被為在候御事ニ候

ここに見える西村越前は、大和法隆寺村棟梁の一人であり、元禄五（一六九二）当時の中井家配下棟梁衆では頭棟梁の地位にあった、法隆寺西里居住西村和泉の係累と見られ、同一五年（一七〇二）の「（法隆寺）東林院奉加帳」に見える「越前」「和泉」（谷直樹『中井家大工支配の研究』思文閣出版一九九二年）のどちらかと推察できる。茨木三河は京大工と思われるが確認できず、東本願寺大工の笠井若狭が加わっていないことも不審な点である。

ちなみに、この明暦・寛文度再建の作事奉行には東本願寺家臣の内から二名が当たり、棟梁については、東本願寺大工の系譜にあると思われる川那辺道継・富井利乗に加え、先の西村、および茨木姓二名の合計五名が記録されている（城端別院同文書）。

奉行　粟津勝兵衛元房　西川伊織部之順

大工　川那部甚兵衛道継　富井勘左衛門利乗　西村越前

椽政純　茨木三河介宗種　茨木志摩椽宗満

次の寛政度再建では、作事奉行が宮谷頼母・大石靱負・松尾勘解由・半田重兵衛・若林半太夫の四名、大工棟梁が笠井若狭・田辺備後・高木淡路の三名となっており（大津屋庄兵衛『金剛一統志』）、この間にどのようないきさつがあったかは未詳である。

大規模建築に改築した明暦・寛文度造営に西村越前を起用したことには、西村の技量への高い評価があったのであり、それは大仏殿の柱割り法を導入するものであったという。それによって柱の位置と太さに新しい工夫を加えたものらしい。史料からその一部を抜粋しよう（城端別院同文書）。

都て柱割方広縁より次第に内へ寸法割付可申処　承応年中御堂御起立之節　棟梁西村越前工夫ニ而唐戸側ヨリ内へ割ル　其訳者本法之通広縁より割出す時者　所ニより柱三尺余ニも相なり候





NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies



而　天地時候の恵ミ日本六十余州天竺者格別唐土ニも右の材木ハ無之候　右西村越前相考ひ候ことく申伝候　既に大仏殿にハ本法之割方ニて外縁より割出し候　誠に功者の棟梁なり

建築工学に不案内なため要領を得ないのが遺憾であるが、さらに注目すべきは作事の進め方について早期の完成を期するために知恩院方式を取り入れたとしていることで、加えて、越中門徒が請け負った御影堂小屋組みや作事用素屋根にもまた、独特の工夫があったとする（城端別院同文書）。

黒谷の堂舎先年焼失より再建十ケ年之内ニ成就有之よし　尤十三間四面ニて御當方の伽藍ヨリ者容易の儀とハ申なから　他院ニてハ不容易の造立誠に一紙半銭の寸志より取集候て　十ケ年ハ早速の出来ニ候　その急速之出来方如何と相尋之処　児屋組のものの分黒谷一山ヨリ伐出し候て　求候木ハ壱番の牛引一本なるよし　然共内廻りハ格別児屋組入用と軒廻りヨリ下の入用とハ半の物と被察候　たとひ今御柱到着仕候共　児屋組の材無之時者御成就なりかたき処道理必然ニ御座候　併御柱虹梁の大材着木無之時者是亦思召ニ任せす候得共　此儀ハ厚信の御同行中引請の事ゆへ暫まかせ置　御作事方ハ御児屋組等に可取懸儀肝要候ハ、　懸案仕り時春より三重二重と組建致出来候うへ是より可取急次第左のことく寛政四年子極月十五日の積り　二重の児屋組たて御一周忌までに仕候ハ、（中略）〈此節す屋根ヲ越中ニテ／工夫ヲ致候故ニ越中屋根と申候〉

知恩院造営が一〇年の短期間で出来たとし、信者の寄進だけで成り立った秘密は、重要な用材を信者の寄進に委ね、購入材を減らしたことにあるとしている。知恩院方式に倣ったことは、用材調達方法のみを言うのか、さらに造営作事進行方式にまで及ぶのか未詳である。知恩院もまた徳川家康の取立てによる木造大伽藍であり、倣うべきことが多かったことは想像に余りある。

なお、地方門徒衆が地域単位で作事場所を請け負う体制は、「丁場分け」と呼ばれる城郭建築の軍役分担に由来すると思われるが、それは大工頭中井家にも取り入れられて財政負担軽減に用いられている。東本願寺造営作事は、それを大幅に採用して経費節減を図り、同時に門徒参加による信仰心醸成・報謝寄進行動への誘いとしたものと理解されよう。

## 現時点における小括

最初の焼失から立ち上がった寛政度再建では、地方門徒が東本願寺門前に地方別に手伝い小屋を構え、その数は六〇を越えた。後にはこれが地方詰所という常設施設に発展し、参詣門徒の宿所兼教導所となっていった。明治度造営時でも詰所は門前町内に四〇軒以上あって、延べ何十万人という門徒衆が手伝いに当たった。詰所の経営者は篤信の有力門徒であり、同時に在俗の世話方でもあり、詰所を拠点に地方門徒衆に信仰と寄進の勧めを行った。因みに明治造営から百十年を経た現在、詰所は四軒を残すに過ぎない。参詣者の多くが、



NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

京都近隣の温泉旅館などを利用するようになったからである。寺内町における、本山参詣者への夜・朝の教化拠点が希薄化している現状が読み取れると思う。

近世東本願寺造営の特徴は、造営作事を地方門徒衆負担分と京都棟梁衆負担分に大きく二分し、地方門徒負担が用材調達・用材運搬・資金拠出・生活物資供与・本山作業・技術提供にまでおよぶことである。京都棟梁衆においても、京都にもたらされた用材を加工し、組み立てる大工仕事をはじめ、左官作業・木彫金彫作業、および不足用材購入などの指示を出すことに業務の中心があり、高度の作業以外は各地から手伝いに上山している門徒衆に委ねるところが多く、ここでも東本願寺が負担すべき雇い大工・雇い職人の直接経費（細工料・日当）を大きく軽減する体制となっている。門徒衆の負担は、すべて信心為本の宗風を貫徹する教化・教諭に基づく行為として本山に受容され、自らの信仰を形に表した信施と位置づけられた。

それほどに門末教化システムが整備されていたのであり、日常的に繰り返される在地での講・法座とそれに伴う説教、あるいは門徒同士が信仰を語り合うご示談などが門徒の信仰を支え、本山造営や再建が必要な時には、それがそのまま募財・信施の勧募システムとなるよう運営されたといえよう。そうした営為が、東本願寺大伽藍の、近世以降の五度に及ぶ再建造営を支えたとしてよいであろう。

以上、実のところ、東本願寺造営史研究から見える課題は尽きない。次々と未知の課題が姿を現わして立ちはだかる思いすらしている。筆者が仏教史学に携わるところから、歴史的課題についてはある程度切り口を想定することはできる。しかしながら、教学的課題あるいは建築学的課題となるとたちまちに足がすくむ思いが強い。とはいえ、多くの専門家の意見を聞きながら総合的造営史を構築していく営みを続けねばならないと考えている。東本願寺造営史研究から見える諸課題から若干について報告を試みたが、近世の社寺造営について、少しでも他の事例などによるご教示を頂戴できれば幸甚に思う。

（なお、本発表は大谷大学真宗総合研究所における共同研究プロジェクト『本願を継ぐ人びと―真宗本廟（東本願寺）造営史研究―』の成果の一部である。）

〈キーワード〉東本願寺、近世造営史、幕府御用林、信施、大工頭中井家

（大谷大学文学部教授）





NII-Electronic Library Service